

神奈川県間学の誕生—横浜いのちの電話設立期の考察—

真の文明ハ山を荒さず川を荒さず

2024年12月17日

村を破らず人を殺さるべし

Lib 活3期生グループ・

田中正造 1912年6月

凡例

1. 参考文献は本文中に(番号)で示し、参考文献の書誌一覧は6頁に記す。

はじめに

当レポートは初めて「いのちの電話」を知った新聞記事(1)に始まる。2章は「横浜いのちの電話」が設立された頃、日本各地で開局された「いのちの電話」を記す。3章は1980年(昭和55)に開局した「横浜いのちの電話」が作成され、刊行した『10年史』(2)『20年史』(3)で学んだことの要約である。なお、3章【2】で横浜いのちの電話略史、参考文献一覧の6頁(7)で『横浜いのちの電話研究資料集』全11冊の書誌を記した。(1)~(10)

I. いのちの電話との出会い—能登半島地震「福島経験 生かしたい」いのちの電話あすから—

2024年(令和6)6月19日付東京新聞の記事「能登に心の支えを」は日本いのちの電話連盟に属するボランティアによる電話相談員の活動を報道している。その記事で、福島いのちの電話の相談員は「能登半島地震から半年になるが、将来への不安を抱える人々のつらい気持ちや悩みに耳を傾け、話を聞き、気にかけている人がいることを伝えたい」と語っている。(1)

日本いのちの電話連盟は2024年(令和6)7月20日から能登半島地震の被災者に向けて電話相談を始めた。記事には「いのちの電話は1953年(昭和28)にロンドンで始まった自殺予防のための電話相談がきっかけであり、孤独や不安を抱えていたり、つらい思いをしていたりする人が生きる力を取り戻せるよう、相談員がボランティアで支える」と解説されている。(1)

現在、日本において北海道から沖縄までいのちの電話は50センターあるが、能登半島地震の被災地の石川県など北陸3県にはなかった。(1)(6)

II. 横浜いのちの電話開局前後—日本各地のいのちの電話の動向

いのちの電話は1971年(昭和46)10月1日に東京が嚆矢、1973年(昭和48)9月25日に関西いのちの電話開局、1976年(昭和51)1月5日に沖縄いのちの電話開局、1977年(昭和52)8月15日に北九州いのちの電話開局、同年8月「日本いのちの電話連盟」結成、1979年(昭和54)1月25日に北海道いのちの電話開局、同年7月10日に島根いのちの電話開局、同年11月1日に奈良いのちの電話開局、1980年(昭和55)9月1日に横浜いのちの電話開局、同年9月20日に栃木いのちの電話開局、同年12月1日に旭川いのちの電話開局、1981年(昭和56)6月20日に神戸いのちの電話開局、1985年(昭和60)6月1日に東京多摩・茨城いのちの電話同日開局、1986年(昭和61)12月1日に川崎いのちの電話開局。(2)~(10)

Ⅲ. 横浜いのちの電話について【1】～【9】 (2)～(10)

横浜いのちの電話開局以前、神奈川県民 30 数名はボランティアとして、東京いのちの電話に所属し活動していた。この県民ボランティアたちは 1978 年(昭和 53)11 月頃から、横浜いのちの電話の設立準備作業を開始し、1980 年(昭和 55)9 月 1 日に横浜いのちの電話を開局へ導いた。

【1】 横浜いのちの電話の基本理念 [なお[解説文]の一部を省略した] (2)3p.～5p.

1. 精神的危機に直面し、助けと励ましを求めている人々とおもに電話という手段で対話し、健全な社会人として生活することができるよう援助し、もって社会福祉の増進に寄与することを目的とする。[社会福祉法人横浜いのちの電話定款による目的である] (4)18p.～20p.

2. 自発的に参加するボランティアによって支えられている。

[ボランティアは自由な決断に基いて、自分のできることを継続的に提供して参加する]

3. ひとりの人間が「私」であることを大切にす。

[ボランティアは後援会活動や相談活動において、個人の能力を生かしながらも社会的地位や肩書によらない一人の人間「私」として働き、支え、生きている。そして生かされている]

4. 仲間・電話のかけ手・社会と協力する働きである。

・仲間との協働

[ボランティアはお互いに信頼をもって相補的に働く。そしてボランティアの多様なあり方を全体の豊かさに通じるものとして大切にし、各々の可能性に従って役割を分担する]

・かけ手との協働

[相談ボランティアはかけ手を支え共感しながら協働する。問題解決はかけ手自身のする事である。お互いにひとりの人間「私」として関わるこの協働作業の中で、それぞれはより自分らしくなっていく]

・社会との協働

[いのちの電話はかけ手に最も必要なことを提供することを常に目指し、他の機関と連携し協働する。かけ手が生きる時、いのちの電話に関わる全ボランティアも生かされる]

5. 個人・法人の自覚と責任を持ち、運動体として活動する。

・個人として持つ自覚と責任

[本当に役立つとはどういうことか。ボランティアだからという甘えは持たない。いのちの電話の組織の一員としての自覚を持ち、個人プレイに走らない]

・運動体としての活動

[市民運動としてのいのちの電話活動の質を常に問い直し、この運動の自発性やバイタリティが持続するようボランティア全員で支え、常に開かれた運動体として活動する]

6. 柔軟に先見性をもって活動する。

[誰かがいつもそこにいて、心の絆を結んでくれるのが「いのちの電話」であり、現在電話が用いられている。より有効な手段がある時は最もよい手段で働くしなやかさを持ち続ける。人々や環境に好奇心をもち、必要に応じて柔軟に行動する運動体として社会に貢献していく]

【2】 横浜いのちの電話略史 (2)～(8) (16)

* 出典(数字)は参考文献一覧を見よ

年月日	横浜いのちの電話・開局(1980(昭和55).9.1)まで	出典
1971(昭和46).10	東京「いのちの電話」開始.	(2)(5)
1978(昭和53).11	横浜いのちの電話開局の準備期間 1978年～1979年. 一人で悩む人に援助の手を—主婦らボランティア. 横浜にボランティアの手によるいのちの電話を(1979.7.1朝日新聞)	(2)(3) (2)(3) (2)(3)
1979(昭和54).2.2	神奈川県在住のボランティアに「いのちの電話横浜開局に関する意見の交換会」を催すことを決め、その連絡を50名に通知を送る.	(3)
1979.3.14	電話のダイヤル即時通話完成.	(16)
1979.7.7	横浜いのちの電話設立準備委員会発足. 準備委員18名決定. 県内から東京いのちの電話に参加している40人が出席.	(3)
1979.8.11	第2回準備委員会. 訓練財務広報渉外の専門委員会を設立.	(3)
1979.9.1	横浜いのちの電話開局を1980年9月1日と決定.	(2)(3)
1979.9.7	横浜いのちの電話事務局の電話番号を324-3131に決定.	(2)(3)
1979.9.18	第3回設立準備委員会開催.	(3)
1979.10.6	「いのちの電話とはたらき」スライドとお話による集会90名参加.	(3)
1979.10.20	電話センターと事務局を横浜市神奈川区泉町に設立.	(2)(3)
1979.1.22	新事務局オープン. この日からボランティア2名交替で勤務.	(3)
1979.10.23	第1期生電話相談員募集申込〆切. 申込者126名.	(3)
1979.11.5	電話相談員第1期生 応募者のグループ面接開始.	(3)
1979.12.1	広報創刊号発行.	(2)(3)
1979.12.6	第1期生66名を決定、電話相談員の研修プログラム開始.	(2)(3)
1980(昭和55).1.12	第5回設立準備委員会. 「横浜いのちの電話の望ましいボランティア像について」一日かけて協議.	(3)
1980.2.12	第6回設立準備委員会. 準備委員会の運営組織、電話センター内部工事着工. 1980年度予算編成基本方針などにつき、協議.	(3)
1980.2.13	相談電話番号決定. 045-323-2112.	(2)(3)
1980.4.4	第1期生の研修講義開講.	(3)
1980.4.21	第1回運営委員会開催(準備委員会を運営委員会に改組).	(2)(3)
1980.5.10	第1回常任運営委員会開催. 専任事務局員を決定.	(3)
1980.5.26-31	アジア太平洋地区電話カウンセリング国際会議に参加.	(3)
1980.7.12	第1回電話相談員前期研修修了式. 第3回常任運営委員会開催.	(3)
1980.8.5	第1回広報委員会開催.	(2)(3)

年月日	横浜いのちの電話・開局(1980(昭和55).9.1)～(1990)まで	出典
1980(昭和55).9.1	午前11時、横浜いのちの電話開局、電話が殺到。 午前11時から午後10時まで受信数41件。	(2)(3)
1980.9.20	ボランティア懇談会。相談員89名。年間受信件数3,311。	(3)
1981(昭和56).1	社会福祉法人認可申請へ準備。土曜医療相談開始。	(2)(3)
1981.4.18	横浜いのちの電話 第1期相談員を認定、認定者89名。	(2)(3)
1981.7.8	第3期相談員応募者(応募者49名)選考。相談員89名。件数11,244。	(3)
1981.9.	第1回・第2回電話相談部会開催。	(2)
1981.12.1	法律電話相談を開始(弁護士5人)。	(2)(3)
1982(昭57).9.1	相談時間午前9時～午後10時に延長。相談員127名。件数14,722。 後援会が発足。	(2)(3)
1982.11.1	社会福祉法人設立発起人会。	(2)(3)
1983(昭和58).3	心理専門電話相談を開始。相談員157名。受信件数17,526。	(2)(3)
1983.9.14	「社会福祉法人横浜いのちの電話」として認可。	(2)(3)
1983.10.17	アジア太平洋地区電話カウンセリング国際会議に参加。	(2)(3)
1984(昭和59).1	相談電話が3台となり、12時から19時まで受信可能。 相談員170名。年間受信件数20,217。	(2)(3)
1884.11.29	新センター移転検討委員会発足。	(2)(3)
1985(昭和60).7	新センターに移転する。相談員178名。年間受信件数19,830。	(2)(3)
1985.8.1	オープンシステム電話室完成、新番号は045-335-4343。	(2)(3)
1985.11.7	全国研修会(みちのく大会)に参加。	(2)(3)
1986(昭61).2.8	24時間体制に向け、相談員全体集会を開催。	(2)(3)
1986.4.1	24時間受信(深夜受信)の実施体制。相談員191名。年間件数22,211。	(2)(3)
1986.9.19～21	横浜マリン大会(いのちの電話全国研修会)を開催する。	(2)(3)
1987(昭62).	24時間受信体制が定着。相談員205名。年間受信件数24,668。	(2)(3)
1987.9.12	自殺予防シンポジウム横浜大会を開催。	(2)(3)
1988(昭63).9.1	ファクス相談を開局。相談員231名。年間受信件数25,452。	(2)(3)
1988.9.3	第1回全国電話相談研究集会開催(横浜)。	(3)
1989(平成1).10.16～19	アジア太平洋地区電話カウンセリング国際会議(韓国釜山)開催。 相談員235名。年間件数22,491。	(2)(3)
1990(平成2).9.1	開局十周年。相談員270名。受信件数21,776。	(2)(3)
1990.9.29	全国電話相談研究集会(於・県民ホール)。	(3)
1990.12.10	ライフサイクル研究会開催。	(3)

【3】 ボランティア (2)21p. (4)153p.～161p.

横浜いのちの電話はボランティアが中心となって企画され、ボランティアにより準備が進められ、そしてボランティアが中心となって運営する。

【4】 地域 (2)21p. (6)3p.～5p.

地域に根を下ろし、あらゆる社会資源の協力を得て、また、お互いに支援しながら地域性豊かな運営に重点を置くことである。東京いのちの電話がキリスト教関係者を中心として開設されたのに対して、横浜では最初から地域社会に呼びかけ、この運動を理解する人々によって支援され、宗教、思想、信条を超えた市民運動として発足し、展開していく。

【5】 相談活動 (2)7p.～8p./26p.～27p. (4)17p.～20p./44p.～84p./94p.～110p./120p.～126p. (6)

一般電話相談、ファクス相談、医療電話相談、心理専門電話相談、法律電話相談がある。電話相談室のオープンシステム化。24時間受信体制の実施。

【6】 研修 (2)53p.～62p. (4)32p.～34p./113p. (6)

ボランティアの募集・養成研修、継続研修(認定相談者)、指導者養成講座。

【7】 部会 (2)7p.～8p./63p.～65p. (4)

相談部会の役割は記録の読み取りと保存、注意すべきケースへの対応、相談員へのケア。調査研究部会は相談業務を通して与えられる様々な内容のものをできるだけ学問的にまとめ整理し、その成果を社会にも還元しようとい図してきた。

【8】 広報活動は広報誌・ボランティアだより・後援会だより。 (2)69p.～71p. (6)

【9】 後援会活動は電話事業運営に必要な財源を確保するための活動組織。 (2)78p. (6)

IV. 横浜いのちの電話の特色 (2)～(4) (6)～(8)

相談活動が全てではなく、相談員でない人々も共存できる組織の柔軟性、多様性がある。研修生から相談員、事務局員、後援会、仕事会、維持会員、イベント・バザーの協力者、横浜市、神奈川県、神奈川新聞社、等々、一般市民の協力がその足跡を支えている。

結論 (1)～(20)

日本のいのちの電話はロンドン・サマリア人同盟、シドニー・ライフラインから多くを学び、影響を受けた。しかしそれらの傘下には属さず、あくまで独自の路線を保ち、今日に至る。

横浜いのちの電話を設立した神奈川県民のボランティア活動は人々の心に希望をもたらし、現在も続く。私はこの一般市民による活動と運動を「神奈川民間学」の成立と捉える。

世界で急激に変容する IT 科学技術は私たちの生活を隅々まで変化させた。いのちの電話が世界各地に設立される一つの要因である。科学技術を駆使した通信伝達手段は電話、ファックス、パソコン、携帯電話、スマホ、生成 AI、量子コンピュータへと次々に姿を変えながら、速度を上げて邁進する私たちの時代。横浜いのちの電話の県民たちは無報酬で運営資金も自分たちで集め、地域に奉仕する活動は私には近寄りがたい。しかし、私の生涯学習の支える頼もしい存在であり、今回のレポート作成から学んだ事を生かしたいと考える。

参考文献・一覧 *年次報告書は記載せず。*謝辞・神奈川県立保健福祉大学実践教育センター図書室

- (1) 片山夏子著「能登に心の支えを」『東京新聞』2024年6月19日(朝刊) 社会面 中日新聞東京本社
- (2) 社会福祉法人横浜いのちの電話事務局編『横浜いのちの電話10年史』1990.9.1
- (3) 横浜いのちの電話20周年記念誌編集グループ編『横浜いのちの電話開局20周年記念誌』2000.9.1
- (4) 横浜いのちの電話調査研究部編/長谷川浩一責任編集『電話相談の基礎と実際』川島書店1990.9.1
- (5) 社会福祉法人いのちの電話二十年史編集委員会編『いのちの共振れーいのちの電話二十年史』社会福祉法人いのちの電話発行 1991.10.1
- (6) 横浜いのちの電話調査研究部編『横浜いのちの電話研究資料集 第九集』1989.3.31
- (7) 横浜いのちの電話調査研究部編『横浜いのちの電話研究資料集』 第一集～第十一集 (3)(3)(5) 第一集 [シンポジウム] Communityにおける危機介入の試みー“いのちの電話”による実践の検討 1983年 <いずみ No.1>
第二集 [相談員によるシンポジウム] 電話相談員のあり方をめぐって 1983年 <いずみ No.2>
第三集 [シンポジウム] コミュニティにおける電話相談活動 1985年 <いずみ No.3>
第四集 “いのちの電話” 相談にあらわれた中学・高校生の精神的問題 1986年 <いずみ No.4>
第五集 “いのちの電話” 相談からみた家族問題・夫婦問題 1986年 <いずみ No.5>
第六集 “いのちの電話” 相談からみた人生問題 1987年 <いずみ No.6>
第七集 “いのちの電話” 相談にあらわれた中学・高校生の「性」の意識とその行動 1987年 <いずみ No.7>
第八集 [シンポジウム] 青少年の精神的危機 1988年 <いずみ No.8>
第九集 地域社会における いのちの電話の役割とその有効性 1989年 <いずみ No.9>
第十集 “いのちの電話” 相談からみた「性」の問題 1989年 <いずみ No.10>
第十一集 ファクス相談試行の実際 1990年 <いずみ No.11>
- (8) 社会福祉法人横浜いのちの電話編『マリンコール』(横浜いのちの電話十周年記念誌) 1990.9.1
- (9) 石井完一郎著「いのちの電話ー危機介入と電話相談」『現代のエスプリ』No.222 至文堂 1986.1.1
- (10) 樋口和彦監修 斎藤友紀雄/平田真貴子責任編集『ひとりで悩まずに…いのちの電話』ほんの森出版 2001.10.13
- (11) アラン・ウォーカー著 大島静子訳『いのちの電話物語』聖文舎 1972.8.10
- (12) 子安増生・丹野義彦・箱田裕司監修『有斐閣 現代心理学辞典』有斐閣 2021.2
- (13) 堀井茂男著「いのちの電話のこれまでとこれから」『心と社会』No.181 日本精神衛生会 2020
- (14) 小林江里香著「中高年の孤立と孤独」『世界』NO.976 岩波書店 2023.12.1
- (15) 斎藤環・畠中雅子著『新版 ひきこもりのライフプラン』岩波書店 2020.4.7
- (16) 下川耿史・家庭総合研究会編『昭和・平成家庭史年表』河出書房新社 2000.5.30
- (17) 笠松幸一・和田和行編著『21世紀の倫理』八千代出版 2015.12.25
- (18) ショジャン・ズボフ著 野中香方子訳『監視資本主義の時代』東洋経済新報社 2021.7
- (19) 星野克美著『人新世の絶滅学』鳥影社 2022.11.30
- (20) 岡野原大輔著「生成AIは良いエッセイを書けるのか」『図書』岩波書店 2024.12.1